

〔国際学会印象記〕 第20回 ASHI (アメリカ組織適合性学会大会)に参加して

佐田 正晴¹⁾, 石川 善英²⁾, 徳永 勝士²⁾

¹⁾ 国立循環器病センター研究所, 実験治療開発部

²⁾ 日本赤十字中央血液センター, 研究部

第20回 ASHI は1994年10月21日から26日まで Pittsburgh で開催された。約980名の参加があり、演題数も初めて350題を越えたそうである。日本からは5施設、およそ10名が参加した。全体的な印象としては、まずその規模の大きさや、米国に限らず新大陸全域やヨーロッパ各国からも多数の参加者を集める範囲の広さ、しかも実に盛り沢山で参加者の興味を惹きつけるプログラムに圧倒される。私達の日本組織適合性学会も一歩ずつ ASHI に近づきたいものだと思う。8つの Plenary Session のそれぞれでは平均3-4人の名だたる研究者が講演を行い、16の Educational Workshop では、細胞分離法、ラボのセットアップ、PCR のプライマー作製法、移植のクロスマッチ法など様々なテーマについて実戦的な解説がなされる。演題発表は大部分がポスターであるが、発表者と議論したり、知り合いになる free time も用意されている。また、企業展示や企業が主催するセミナーの多さにも強い印象を受けた。個人的には、J. Hansen による非血縁骨髄移植成績の分析や(後出)、R. L. Truitt によるマウス実験系での GVL の解析結果、D. I. Watkins らにより霊長類の class I alleles の配列解析が進んだことなどに興味を覚えた。以下に移植関連演題と HLA の DNA タイピング法に関する演題に絞って、その印象を記していただいた。(徳永)

移植関連演題：

移植関係では、Plenary Session 3 部門(9演題)、Workshop 4 課題、また一般演題は腎移植、骨髄移植およびその他の臓器移植における組織適合性、免疫学的モニターリング、同種移植に対する液性および細胞性免疫、GVH 反応、免疫抑制、輸血、

組織適合性抗原の発現、に関し102演題が発表された。

1) 臓器移植と HLA matching

Terasaki は UNOS と UCLA に登録された死体腎移植症例の詳細な解析を行い移植腎生着に対する ABDR 抗原適合度、特に ABDR 6 antigen matching の重要性を強調するとともに、class I エピトープグルーピングによる permissible antigen matching の可能性を示唆した、Opelz も死体腎移植約50,000例について ABDR 抗原適合度の解析を行い Terasaki と同様な結果を示し、再移植に際し DPB1 allele を適合させることにより移植成績が向上することを報告した。死体腎移植の成績向上には class II genotyping による抗原決定が必須と考える欧州グループと、高品質な抗血清を用いれば現行の serotyping で良しとする米国グループが、お互いのデータに基づき議論を展開した。心、肝移植については、最近の深刻なドナー不足を反映し、再移植を最小限に抑え医療費を軽減させるためにも HLA matching による移植を更に強化実施すべきである、という点で発表者間で意見の一致を認めた。

2) 骨髄移植と HLA matching

Hansen らは HLA-A, B serological matched の非血縁間骨髄移植330例の DRB1, 3, 5 および DQB1 genotyping を施行し、急性 GVHD との相関について検討した。330例中266例が DRB1, 3, 5 および DQB1 allele matched で、これらの症例では grade III-IV の GVHD 頻度が特に低率だった。非血縁間骨髄移植では DRB および DQB1 allele の matching により良好な移植成績が得られることが報告された。(佐田)

HLA の DNA タイピング法に関する演題：

HLA の DNA タイピング法に関しては40題近くの演題が提出された。その中で興味をひいたのは Microtiter Plate Hybridization (MPH), Line Probe Assay (LiPA), Sequence-based Typing (SBT) 法である。MPH 法と LiPA 法は PCR-SSO の原理を用い、プローブをそれぞれマイクロプレートあるいはフィルターの短冊に張り付けることにより、SSO 法の操作性を改善したものであり、多数検体あるいはグループ分けのためのタイピング法として有望と思われた。SBT 法に関しては、我々もクラス I A2 のタイピングを報告したが、約10題あった報告のほとんどは DNA シークエンサーのメー

カーが関係したものであった。従来の SBT 法はヘテロ接合体のタイピングは極めて困難であり、ルーティン検査に使える方法ではなかった。しかし今回報告された方法はルーティンでの使用を目的としており、テンプレート DNA を 1 本鎖とし、*Taq* polymerase を Sequenase に代えることによりシグナル強度をほぼ一定とし、さらにソフトウェアにアリーの塩基配列のデータベースを持たせ、ヘテロ接合体のサンプルでもアリーの自動判定が可能となっていた。アリールタイピング法の選択肢の1つに十分なり得る方法であるという印象を得た。(石川)